GEORGES ROUAULT

出光美術館所蔵
ジョルジュ・ルオー展

2009
10.28.wed～11.29.sun

20世紀を代表するフランスの巨匠、ジョルジュ・ルオー（1871～1958）。黒々とした力強い描線と、鮮烈な色彩にいろどられたその作品は、宗教的モティーフのみならず、道化師や娼婦、家族や母子といった世俗の人々の姿をも、人間味あふれるまなざしで描き出しています。

自らが敬虔なカトリック教徒であったルオーは、イエス・キリストの受難と同様に、人間が生きていくうえで直面するさまざまな苦しみから目をそむけることなく、それらを敏感に感受し、絵筆にこめて表現し続けました。闇の中に光を求めるかのようなその画業を通じて、ルオーの作品には内部から輝き出すような光が宿り、時代や国を越えて、いまなお人々の心を照らし続けています。

本展では、質量ともに世界最大規模を誇る出光美術館のコレクションから、代表作『受難（パッション）』や版画集『ミセレーレ』をはじめとする約170点の作品によって、情熱（パッション）の画家、ルオーの魅力の全貌をご覧いただきます。

作品リスト

番号	作品名	制作年	技法
1	キリストの顔	1930年代	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
2	ジョルジュ・ルオー遺愛の絵具皿、絵筆、絵具		

第一章　闇をみつめて

1871年5月27日。蜂起した民衆による革命政府、コミューンと政府軍の戦いの砲火飛び交うパリのとある地下倉庫で、ルオーは産声をあげました。早くから芸術的才能を発揮したルオーは、ステンドグラス職人のもとでの修行を経て、19歳で国立美術学校に入学します。フランス象徴主義を代表する画家、ギュスターヴ・モローの指導のもと、宗教画や神話画の制作にいそしみますが、モローの助言もあり、やがて学校を辞めて独自の道を探求しはじめます。

1898年の恩師モローの死は、ルオーに大きな精神的ショックを与えます。修道院に通ったり、体調を崩して転地療養に出かけたりする中、出会ったカトリック系の作家や哲学者たちとの交流を経て、ルオーの目が向かったのは、道化師や娼婦などといった同時代の世俗の人々であり、欺まんに満ちた社会の底辺で生きる人々の赤裸々な姿でした。こうして、世の中をおおう深い闇をみつめることから、画家としてのルオーの本格的な歩みがはじまったのです。

番号	作品名	制作年	技法
3	湖	1897年	水彩、パステル・紙
4	キリストと弟子たち	1901年	木炭、水彩、グワッシュ、パステル、インク・紙（紙で裏打ち）
5	《回想録》ギュスターヴ・モロー（小さな帽子をかぶった）	1926年	石版
6	三人のヌード	1907年	絵付けされた錫釉陶器（ファイアンス）の壺
7-1	曲馬団の娘〈表〉	1903年または1905年	水彩、パステル・紙
7-2	曲馬団の娘〈裏〉	1903年または1905年	水彩、パステル・紙
8	道化師の顔	1902−09年	油彩、グワッシュ・カルトン
9	レスラー	1906年	油彩・カルトン（カンヴァスで裏打ち）
10	娼婦（習作）	1906年頃	薄墨、グワッシュをかけた水彩、パステル・紙（カンヴァスで裏打ち）
11	プロ夫妻Ⅱ　または　風俗の習作	1905年	水彩・カルトン（パネルで固定）
12	サロンにてⅠ　または　劇場にて	1906年	水彩・紙（パネルで固定）
13	辱めを受けるキリスト	1912年頃	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
14	エクソドゥス	1911年	油彩・紙（カルトンで裏打ち）
15-1	水浴の女たち（構成）	1910年頃	油彩・紙
15-2	水浴の女たち（裏面）	1910年頃	グワッシュ・紙
16	サロン・ドートンヌでの審査員たちの討論	1913年頃	エッサンス絵画、コンテ・紙
17	満足	1910−13年	モノタイプ、グワッシュ、パステル・紙
18	白い靴下の道化師	1912年	グワッシュ、コンテ・紙（カルトンで裏打ち）
19	客寄せ	1919年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
20	裁判官	1912年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）

第二章　やがて、内なる光が　《ミセレーレ》

荒々しい筆づかいと暗い熱を帯びたような色彩、ときにグロテスクなまでにゆがめられたルオー初期の作品（～1919年）は、世間的に必ずしも評価の芳しいものではありませんでした。孤高の歩みを続けるルオーは1911年、ある人物と書簡のやりとりをはじめます。批評家で詩人のアンドレ・シュアレス。彼がルオーに書き送った芸術家の定義とは、次のようなものでした。「芸術家とは、愛をその最も美しいもろもろの形のもとに世に与え、この世を苦悩より救うものです」

1922年、ルオーはその画業において記念碑的な作品となる銅版画集《ミセレーレ》の制作に着手します。「憐れみたまえ」を意味するラテン語をタイトルとしたこの版画集は、シュアレスとの交流や父の死、第一次世界大戦などの体験を背景としながら深まっていったルオーの宗教的思索が、独自の版画技法の追究によって形となったものでした。特に、スクレイパーという道具を使って版面を研ぎ出すような作業を繰り返すことで、モノクロームの画面に、内側から輝き出すような光が宿ったのです。

番号	作品名	制作年	技法
	銅版画集《ミセレーレ》58点の内		
21	1　神よ、われを憐れみたまえ、あなたのおおいなる慈しみによって	1923年	銅版
22	3　たえまなく笞打たれ…	1922年	銅版

番号	作品名	制作年	技法
23	4　哀れな放浪者よ、お前の心の中に身を避ける	1922年	銅版
24	7　自分を王だと信じているが	1923年	銅版
25	8　自分の顔をつくらぬ者があろうか?	1923年	銅版
26	10　悩みの果てぬ古き場末で	1923年	銅版
27	11　明日は晴れるだろう、と難破者は言っていた	1922年	銅版
28	12　生きるとは辛い業…	1922年	銅版
29	13　でも愛することができたなら、なんと楽しいことだろう	1923年	銅版
30	16　上流社会のご婦人は、天国で予約席に着けると信じている	1922年	銅版
31	22　さまざまな世の中で、荒地に種播くは美しい業	1926年	銅版
32	23　孤独者通り	1922年	銅版
33	27　世のことがらは涙を誘うものがある…	1926年	銅版
34	28　“われを信ずる者は、死すとも生きん”	1923年	銅版
35	29　朝の祈りを歌え、陽はまた昇る	1922年	銅版
36	30　“われら…彼の死において洗礼を受けたり”	1923年	銅版
37	32　主よ、あなたです、わたしはあなたを認めます	1927年	銅版
38	36　これが最後だよ、おやじさん!	1927年	銅版
39	39　われらはみな愚か	1922年	銅版
40	42　母親に忌み嫌われる戦争	1927年	銅版
41	44　わが美しの国よ、どこにあるのだ?	1927年	銅版
42	46　“正しい人は、白檀の木のごとく己れを打つ斧に香を移す”	1926年	銅版
43	47　深き淵より…	1927年	銅版
44	52　法は苛酷、されど法	1926年	銅版
45	53　七つの剣の悲しみを負う聖母	1926年	銅版
46	54　“死者よ起て!”	1927年	銅版
47	55　盲人も、時には目明きを慰めた	1926年	銅版
48	56　高慢と無信仰のこの暗き時、見守りつづける地の果ての聖母	1927年	銅版
49	57　“死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順なれば”	1926年	銅版
50	58　“われらが癒されたるは、彼の受けたる傷によりてなり”	1922年	銅版
51	《回想録》ボードレール	1926年	石版
	《「悪の華」のための14枚の銅版画》14点の内		
52	1　悪魔	1926年	銅版
53	4　悪の華	1926年	銅版
54	8　悪魔Ⅲ	1926年	銅版
55	9　骸骨	1926年	銅版
56	11 “生者並みに誇り高く、われとわが貴なる姿を誇りつつ…”	1927年	銅版
57	13 “〈放蕩〉と〈死〉は…”	1926年	銅版

第三章　光をかさねて

ルオーが《ミセレーレ》において試みた手法は、油彩画の制作においても生かされています。油彩の場合は、いったん描いた画面を、絵具がほとんど乾いたころにパレットナイフでごしごしと削りとり、その上にまた描いていきます。それによって、薄く削りとられた絵具層が雲母のようにかさなって、微妙なマティエール（絵肌）と繊細な輝きを生み出すのです。かくしてルオー中期（～1934年頃）の油彩画は、黒々とした描線の内部に新たな光をたたえるようになりました。

道化師や踊り子といった世俗の人々の姿にも、聖なるキリストの姿にも、ルオーはひとしくまなざしを注ぎ、そこから感受したものを自らの手で色彩とマティエールに置き換え、表現していきました。絵具を削ってはかさねることによって光を生み出すルオーの手法は、人間の精神の奥深くに沈潜し、寄り添い、その苦しみの手ざわりをひとつひとつ確かめ形にすることを通して、その先に希望を見出そうとする営みでもあったのではないでしょうか。

番号	作品名	制作年	技法
58	女の顔	1925年頃	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
59	アニタ	1930年	グワッシュ、パステル・紙
60	水浴の女四人（構成）	1920−29年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
61	シエールの思い出	1930年	油彩・カンヴァス（カンヴァスで裏打ち）
62	磔刑	1930−35年	グワッシュ・紙（カルトンで裏打ち）
63	“イエスがあなたを慰めに来たということは、ひたむきな巡礼者よ、それはあなたが許されるであろうということです”	1930年	墨、グワッシュ、パステル・紙
64	アルゴ舟の人たち〈彼らが出帆準備をするのを私は見る。見知らぬ大陸へ向かって船出するのだ…〉	1932年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
65	小さな女曲馬師	1925年頃	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
66	小さな家族	1932年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
67	踊り子	1932年頃	墨、油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
	《流れる星のサーカス》17点の内		
68	1　扉絵　見世物小屋の呼び込み	1934年	色刷銅版画
69	5　曲芸師	1934年	色刷銅版画
70	6　小さな女曲馬師	1935年	色刷銅版画
71	11　アーサー親方	1934年	色刷銅版画

番号	作品名	制作年	技法
72	16 オーギュスト	1935年	色刷銅版画
73	17 眠れ、よい子よ	1935年	色刷銅版画
74	十字架のキリスト	1949年頃	エマーユ（七宝）

第四章　そして、光は闇をこえ《受難（パッション）》

ルオーと37年の長きにわたり文通を続け、その画業に少なからぬ影響を与えたアンドレ・シュアレス。1935年、ルオーはシュアレスの宗教詩《受難（パッション）》の挿絵をもとにした連作油彩画を完成させます。これらの作品は、本来は木版画用の下絵として制作されたものを、画商ヴォラールの要請により油彩画として描き直したものです。下絵を元のサイズのまま切り取って台紙に貼り、その上に描いているため、余白の部分は灰緑色の縁取りとして仕上げられ、それがこの連作に独特な視覚的効果をもたらしています。

みるひとは、うがたれた窓から物語の世界をのぞきこむように、キリストの受難をめぐるさまざまなイメージを目にすることになります。ときに難解な暗示や深遠な象徴を含むそれらは、ルオー後期油彩画の特徴となる、絵具を積極的に盛りあげかさねていく手法の出発点を示してもいます。画面を削っては描いた中期の作品とはまた異なる輝きを発する色彩とマティエールは、キリストの受難という悲劇を招いた人間精神の深い闇をも超えうる光を、帯びはじめているようです。

番号	作品名	制作年	技法
75	《受難》最初の試案	1928−32年	墨、グワッシュ・紙
76	《回想録》アンドレ・シュアレス	1926年	石版
77	《回想録》自画像I	1926年	石版
78	アンドレ・シュアレス著『受難』	1939年	
	連作油彩画《受難》64点		
79	1　受難	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
80	2　聖顔	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
81	63 “聖心と三つの十字架”	1935年	油彩・紙（カルトンで裏打ち）
82	55 “駒鳥よ、孤独の優しい働き手よ…”	1935年	油彩・紙（パネルで裏打ち）
83	3 “…影まぼろしのように彼は進む”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
84	4 “悲しきものが地を低く這う…”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
85	5 “お前たちは世の苦しみを知っているか?”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
86	6 “…私たちは同じ晩に死ぬだろう…”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
87	7 “渡り者と農夫たち”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
88	8 “そして私は、老いたるアダムだ”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
89	56 “夜のしじまはおびただしい嘆きによってつくられている（渡り者）”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
90	9 “…されば彼らを港に導きたまえ…”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
91	10 “この眼、この悲しそうな眼”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
92	11 “彼は再びタボール山を見る”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
93	12 “私は再び悪魔を見る、学者ぶるそのさまを…”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
94	13 “私はあなたの影に寄り添って走ります”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
95	62 聖顔	1935年	油彩・紙（カルトンで裏打ち）
96	14 “時は来た…”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
97	15 “影は彼女を貪り食った…”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
98	16 “壁に沿って夜が来たとき…”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
99	17 “悲しみの独房…”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
100	18 “墓場はすべて怒りと不安の巣窟である”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
101	19 “…二つの宮殿に沿うこの荒涼とした道”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
102	20 “…盲目の城壁には一つの口しかない”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
103	57 “C.ポンティウス・ピラトゥス総督（ピラトゥスの前のイエス）”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
104	21 “彼は壁の間で光を放つ…”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
105	22 “燃ゆる灯火の芯のごとく…”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
106	23 “思い、深いまなざし”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
107	24 “その御足にエジプトのあらゆる香料を注ぐこの娼婦…”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
108	25 “善い盗人…悪い守銭奴…”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
109	26 “ゴルゴタにおけるアダムとエヴァ”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
110	27 “…アダム、この世で最古の農夫”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
111	28 “何という流血の畝、何という落涙の耕地”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
112	29 “この人を見よ”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
113	30 “ここに、一つの世界が幕を下ろして消え失せ、別の世界が生まれる”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
114	31 “もう−私を−見る−のを−やめ−よ”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
115	32 “もっとそばに来い…”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
116	33 “…彼はコレージュ・ド・フランスの教授になるだろう…”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
117	34 “ピゥ教授…”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
118	35 “彼女は自分の穴から外へ出た、夕暮の暑い時刻に…”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
119	36 “彼はお前のためにも来たのだ…”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
120	37 “あらゆる悪の知恵…”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
121	38 “決して笑わないで嘲ける人…”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
122	39 “そして全世界を何と交換するのか”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
123	40 “優しい婦人たち…”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
124	41 “…もし彼死なば”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
125	58 “夢は私を拒み、私はもういられない”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）

番号	作品名	制作年	技法
126	42 “橄欖山”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
127	59 “三人のマリア賛歌” Ⅰ	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
128	64 “三人のマリア賛歌” Ⅱ	1935年	油彩・紙
129	43 “泉の水が葦に囁くように…”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
130	44 “十字架の道” Ⅰ	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
131	45 “墓の歌”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
132	46 “十字架の道” Ⅱ	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
133	47 “弟子たち”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
134	48 “マリアよ、あなたの息子は十字架の上で殺されるのです”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
135	49 “途上で”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
136	50 “私はここに、お前のそばにいる”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
137	60 “出現”（墓から出るキリスト）	1935年	油彩・紙（カルトンで裏打ち）
138	51 “ミルラ香を持つ男”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
139	52 “おお主よ、唯一の顔…”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
140	53 “そしてあなたによってのみ、私はすべてを信じます、夜に呑まれぬために”	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
141	54 “十字架の道” Ⅲ	1935年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
142	61 “十字架上のキリスト”	1935年	油彩・紙（カルトンで裏打ち）

第五章　光みちるとき

《受難（パッション）》シリーズによって示されたルオーの新たな表現手法は、晩年に向かうにつれ、さらなる展開を遂げていきます。たっぷりとかさね塗りされた絵具は、まるで溶岩を思わせるほどに分厚く盛りあがったマティエールを生み、色彩はいよいよ明るさとあたたかみを増していくのです。ときに笑みすら浮かべてみえる道化師や、目を閉じて静かに瞑想にひたるキリストの表情には、この世の苦しみを超越したその先の世界へと、みるひとをいざなうかのような神秘的なムードが漂っています。

一方、ルオーは〈聖書の風景〉などと題された大型の風景画も描き続けました。晩年の作品ではマティエールの輝きが最高潮に達し、色彩と形態のすべてがおだやかな光のもとに調和しています。人間が生きていくうえで宿命的に背負っている苦しみから目をそらすことなく、常にそこに寄り添いながら自らの画業を深め続けたルオー。画面にみちる光は、闇の中に光を求め、それを絵筆によって全うした画家の歓喜の光ともいえるでしょう。1958年、86歳でパリに没した後も、その光は宗教や国境を超えて人々のもとへと届いています。

番号	作品名	制作年	技法
143	キリスト	1929−39年	油彩・紙（カルトンで裏打ち）
144	道化師たちとプルチネッラ　または　グロテスク	1938年頃	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
145	二人の友	1938年頃	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
146	バッカス祭	1937年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
147	たそがれ　あるいは　イル・ド・フランス	1937年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
148	伝説の風景	1938年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
149	キリスト（とパリサイ人たち）	1938年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
150	キリストと盗賊	1939年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
151	放蕩息子の帰宅	1929−39年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
152	受難（横向きの）	1937年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
153	トリオ	1935−40年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
154	受難（うつむいた）	1939年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
155-1	ピエロ〈表〉	1956年頃	油彩・素焼きの皿
155-2	花〈裏〉	1956年頃	油彩・素焼きの皿
156	夜景　または　秋の風景	1939年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
157	たそがれ　または　鐘楼	1939年	墨、油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
158	聖書の風景　または　風景（運河）	1940−48年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
159	レナ	1937−39年	油彩・カルトン
160	ピエロ	1938−39年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
161	正面を向いた道化師（半身像）	1939年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
162	黄色い花瓶の花	1939年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
163	優しい女	1939年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
164	X夫人	1947年頃	油彩・紙（パネルで固定）
165	タンブラン帽の女I	1931−39年	油彩・紙（カンヴァスで裏打ち）
166	葉子	1948−52年	油彩・カルトン（パネルで固定）
167	ペドロ	1948年頃	油彩・カルトン（パネルで固定）
168	オネズィーム	1952年	油彩・カルトン（パネルで固定）
169	アルルカン	1953−56年	油彩・カルトン（パネルで固定）
170	聖書の風景	1953−56年	油彩・カルトン（パネルで固定）
171	秋の終りII	1952年	油彩・カルトン（パネルで固定）
※172	聖なる顔	1939	油彩・紙

※は北海道立近代美術館蔵。その他はすべて財団法人出光美術館蔵。

北海道立近代美術館
〒060-0001 札幌市中央区北1条西17丁目
TEL011-644-6882　FAX011-644-6885
ホームページ　http://www.aurora-net.or.jp/art/dokinbi/